

文化論集第57号
2020年3月

消 息

猪股正廣先生のご退職にあたって

本学部でドイツ語担当の同僚として約30年間をともにした猪股正廣先生が、2019年3月末に定年退職の日を迎えます。公式的には猪股先生ないしは猪股教授とお呼びすべきなのですが、どうも違和感があり、これまでのつきあいどおり以下では猪股さんとします。

猪股さんが本学政治経済学部政治学科に入学したのは1969年4月です。これは大学紛争の影響によって東大が入試を中止した年です。ちなみに私も同年入学なので、当時のことはよく覚えています。安田講堂陥落で峠は越したとはいえ、本学でも紛争は続いており、バリストなどで窓ガラスもなければ授業もなく、構内は立看にアジビラ、アジ演説と所構わずの貼紙、そしてクラス討論に学生集会・デモといった騒然とした日々でした。学部は違えど猪股さんもその中でさぞや自由を謳歌していたことと思います。こうした社会的背景や小田実の『なんでも見てやろう』などの影響もあり、当時少なからぬ若者が、今よりはるかに情報も乏しい中、横浜から出ているナホトカ航路の船とシベリア鉄道を乗り継ぐなどして、長期の海外旅行・放浪に出ました。それは今日のともすれば定型化された卒業旅行や短期留学などとはかなり趣を異にするものです。猪股さんもまた、1973年には一年間休学して世界を巡っています。

猪股さんといえばアフリカという印象を周囲の多くの人が抱いています。これはこの時のことに由来します。アフリカでは食べることが大変で、朝目が覚めると「さて今日は何にありつけるのだろうか」という考えが頭をよぎり、駱駝の肉を煮て洗面器に入れて売りに来るのを買って食べたなどという話をご本人から聞いたことがあります。また猪股さんが非常勤講師を務めていた大学の学生から、授業時にアフリカの歌を教えてもらってみんなで歌ったとも聞きました。

アフリカのみならず、猪股さんといえば韓国でもあります。語彙や文法などに見られる日本語と朝鮮語の近親性に関心を抱いたとのことで、夏休みを使って、各一か月半ず

つ三回にわたり韓国で生活しながら朝鮮語の集中講座に参加した由です。私も同じ理由で、一時朝鮮語を少しかじったことはありますが、こうした行動力には驚きます。その成果は「韓国の高等学校での第2外国語教育」をはじめとするいくつかの論文などに見ることができま

紛争もほぼ終息した1975年3月、猪股さんは学部を卒業し、同年4月に本学の文学研究科独文学専攻博士前期課程に進学します。政治学からハインリヒ・フォン・クライストという18世紀末から19世紀初めの作家の研究に転進した理由は、ドイツ語がおもしろくなったことに加えて、作品との出会いがあり、また上記の世界旅行でドイツに親しい友人や家族ができたこともその遠因であったとの由です。当時の独文専攻ではこうした転進組は珍しくなく、いろいろな学部や経歴を経た院生がいました。1977年3月には同課程を修了、同年4月に同専攻博士後期課程に進み、1980年3月に同課程を満期退学、あちこちの大学で非常勤講師としてドイツ語の授業を担当しました。上述したアフリカの歌の話はこの頃のことです。

その後1985年4月に本学部の専任講師に就任し、1988年4月に助教授、1993年4月に教授に昇任します。アフリカの猪股に次いで、これは主に学生側からのもう一つの印象として、失礼ながら「(ド)ハマリの猪股」というものもあります。かつて猪股さんの組に在籍していたある学生は「授業中の緊張感がハンパないッス」と言っていました。そして学生による授業と教員についての評価誌である Milestone Express 2019には「強い精神力を持て。出席しても単位はこない。先生に媚びを売っても単位はこない」と書かれています。しかしその意味するところは〈授業には真剣に臨め。神は自ら助くる者を助く〉ということで、猪股さんの授業の本質を突いていると思います。同じくドイツ語の同僚の荒井さんから聞くところでも、「猪股さんに落された学生は、猪股さんを恨むなどはしておらず、自分に非があったことを理解している」とのことです。こうした点で猪股さんの授業への態度は、昨今の忌まわしきパワハラやアカハラなどとは似て非なるものです。

そしてわれわれにとって何よりも猪股さんを強く印象づけているのは、かつての教授会、今日の学部運営委員会などでの旺盛な批判精神に基づく積極的な発言と論客ぶりです。石塚博司学部長のもと、1992年に学生担当教務副主任に就任した時は「発言封じに

教務に入れられた」と笑っていたのを覚えています。また1988年から89年には教員組合の執行委員として教研部長を務めています。団交の場面などは実見していませんが、総長や理事などを相手に奮戦したであろうことは想像に難くありません。こうした猪股さんの言動を見ていて感ずるのは、その背後に原理・原則や正義、公正などを何よりも尊重する態度、昔風に言えば〈強きを挫き、弱きを助く〉の俠客的な心持が強いということです。これがどこから来るのかは分かりません。政経学部への進学理由についてご本人は「つぶしがさくと思った」と言っています。しかし私は、すでに幼いころから無意識の裡にもこうした心情と政治性指向が身に付いていればこそその経済ではなく、政治学科志望ではなかったかと考えています。人間は収まるところに収まるものです。

かつてゲーテ・インスティトゥートがミュンヘンで行った日本人ドイツ語教員のための教授法研修講座という催しで猪股さんとご一緒したことがあります。その時も日本の事情などを踏まえて、積極的に発言・反論などしていたことはみなさんのご想像のとおりです。この研修会はいかにもドイツらしく、朝早くから始め、時として夕刻まで主催者側の用意した綿密かつ周到な計画に基づいて行われました。ある時期の主題は、文化(Kultur・クルトゥーア)の構造、理解と外国語教育といったことでした。ある朝研修が始まる前に参加者がそろって雑談をしていると、猪股さんが「毎日毎日朝っぱらからクルトゥーアで、頭がクルットウーラ!」という絶妙な一言を放ち、全員大爆笑したことが忘れられません。これもまた日本人教員の〈啓蒙〉とドイツ式授業方法などの〈伝導〉という色彩が強かった研修会への反発と皮肉の猪股式発露だったのだと思います。

こうしてさまざまな既成の権威に対して物申し、自らに対する学生からの評価を知りつつも、最後まで真摯な授業を貫いたということは、猪股さんならではの正義感、公正観がその根底にあったればこそこのことでしょう。旧制高校出身の、そして戦争体験者の教員が、気がついてみれば大学から消えていたように、大学紛争を経験した教員も今や絶滅寸前です。大学は適応よりも懐疑を追求するところです。猪股さんの退職で、紛争の時代を知る反骨の士がまた一人本学から去ってゆくのは寂しい限りです。

一方猪股さんの最近のお気に入りにはラオスだそうです。そこで最後に余計なことを一言申し上げます：海外に出るについては心配しませんが、旺盛な行動力が仇となり、何処かで虎やライオンに喰われて消息不明にならないようにだけはお気をつけのうえ、これからは自由な旅をお続けください。Gute Reise (よき旅を)!

主要な論文等

フランツ・ヴェルフエル 『バルバラあるいは敬虔』 —自伝と小説—

文化論集 54号 67-86 2019年3月

フランツ・ヴェルフエルとカール・クラウス

文化論集 51・52合併号 109-137 2018年3月

フランツ・ヴェルフエルの家族小説『ナボリの兄弟姉妹』

文化論集 48・49合併号 73-94 2016年9月

クライスト『ペンテズィレーア』 —使者の報告とテイコスピア 過去と現在—

日本独文学会研究叢書 095号 H.v. クライストの戯曲を読み直す 62-75 2013年9月

『ペンテズィレーア』 —使者の報告あるいは神話の時間—

文化論集 41・42合併号 149-177 2013年3月

フランツ・ヴェルフエル『ヴェルデイ オペラの小説』 —有り余る着想 Einfälle —

文化論集 38号97-121 2011年3月

クライスト『公子ホンブルク』のコンテクスト

文化論集 37号 1-26 2010年9月

クライストの『決闘』

文化論集 25号 21-35 2004年9月

クライストの『決闘』について

日本独文学会研究叢書 030 H.v. クライストの散文作品を読み直す 53-66 2004年9月

フォルカー・ルートヴィッヒと金敏基の『地下鉄1号線』

文化論集 23号 47-70 2003年9月

韓国的高等学校での第2外国語教育 (その2)

文化論集 18号 29-70 2001年3月

洪世和著 米津篤八訳『コレアン・ドライバーは、パリで眠らない』

文化論集 19号 83-99 2001年11月

韓国的高等学校での第2外国語教育

文化論集 16号 63-92 2000年3月

フランスにおけるクライスト作品受容の一側面 —『公子ホンブルク』のオーディニョン演劇祭公演を中心に—

文化論集 14号 21-33 1999年3月

輸入ドイツ語教科書使用上の諸問題

文化論集 11号 25-58 1997年10月

ハインリッヒ・フォン・クライスト『ヘルマンの戦い』

文化論集 9号 31-58 1996年9月

コンピューターによるドイツ語授業

文化論集 5号 225-258 1994年9月

クライスト『チリの地震』群像

文化論集 2号 141-153 1993年2月

修辞学とクライストの案出

文化論集 1号 97-126 1992年8月

Redundanz による読解授業

ドイツ語教育部会報 39 20-24 1991年4月

クライスト・コロキウム報告

人形芝居 6号 55-61 1991年3月

クライスト『チリの地震』の構成と時の接続詞 als

早稲田商学 333号 165-184 1989年2月

ペーター・ローザイと『銀河』

ヨーロッパ文学研究 36号 218-223 1988年

感覚 Empfindung と案出 Erfindung プレンターノ、クライスト、C.D. フリードリッヒ

早稲田商学 320号 107-144 1987年1月

Amphitryon における神話的変容のパロディー

早稲田商学 313号 125-145 1986年2月

ハインリッヒ・フォン・クライスト『アンフィトリオン』冥府行神話を中心として

都留文科大学研究紀要 22集 173-186 1985年3月

クライスト『聖ドミンゴ島の婚約』その悲劇的結末の意味

アンゲルス・ノーブス 10号 1-16 1982年12月

ミヒャエル・コールハースの正義感と孤独

ヨーロッパ文学研究 29号 27-40 1982年3月

公民ミヒャエル・コールハースと市民ハンス・コールハーゼ

アンゲルス・ノーブス 9号 33-40 1981年12月

『シュロップフェンシュタイン家』の成立

早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊6集 27-34 1980年3月

クライスト『シュロップフェンシュタイン家』

アンゲルス・ノーブス7号 25-40 1979年12月

クライストの『聖ツェツィーリエ或いは音楽の力』について

アンゲルス・ノーブス6号 16-29 1978年12月

原 口 厚